

言葉の意味と用法

国 広 哲 弥

1. 語の意義素と拡張用法

「赤」という色名は典型的には血のような色を指すが、一方で「赤砂糖」とか「赤蟻」のように典型的「赤」からひどくかけ離れた色彩も指す。一般に語の意味・用法を考えると、この典型用法と拡張用法の二つを区別した上で、両者を十分に記述することが必要である。従来は典型的な用法のみに注意を払って、拡張用法の範囲を十分に明らかにすることは等閑に付されていたように思う。拡張用法の範囲は言語によってズレがあることが多いので、特に対照言語学的に調査することが必要である。上記の「赤砂糖」は英語では 'brown sugar' となる。同じく「赤い髪の毛」'red hair' と言っても、その指す実際の色合いはかなり異なる。

2. 固有名詞の意味

意味論でも一般の辞典でも、固有名詞は言語の周辺部に位置するものとして、ほとんど取り上げられてこなかった。もし我々の言語習得の目標が、言語表現の意味を十分に理解することであれば、そして当然そうあるべきであるが、多かれ少なかれ一般に知られているという前提で用いられている固有名詞が何を指しているかが分からないでは、理解に支障をきたす。一般の辞典編集でも、新語が現われると、それが一般化していなくてもいち早く取り入れようとするが、反対に、本国人の多くが知っていても、固有名詞は固有名詞であるという理由だけで採録しないという風潮がある。たとえば、Edsel, Walter Mitty, Norman Rockwell, Houdini などが何を指すかを知らないでは *Time* の記事も読むことはできない。

3. 表現構造の比較：知覚報告をめぐって

二つの言語の間で質のよい翻訳を行なおうと思えば、両者の間の表現

構造の違いを知っておくことが肝要である。一例として知覚報告を取り上げる。「角を左に曲がると、ポストがあります」は英語の普通の表現では、*'Turn to the left, and you will find a mailbox there.'* となり、イタリック体で示した知覚報告の部分が日本語では欠けている。なぜこのような相違が生じるかは、もう一つの表現構造の違いである英語の人間中心表現に対する日本語の状況中心表現の対応に求めることができる。知覚報告はまさに人間が表に出てくる表現なのである。日本語表現で人間が表面に出ることを嫌うことと、日本文化との相関関係については、安易に結論を出さないように注意が必要である。外界を描写するには、どの言語でも人間中心と状況中心のどちらかを選ばざるを得ないからである。

4. 認知活動と言語表現

どの言語の場合も、言語表現の裏には人間特有の外界認知法がひそんでいる。物の形を変化の痕跡ととらえるのがその一つである。これは普通の修辭的比喩とは区別されるもので、後者がなくても構わない装飾的なものであるのに対して、前者は、それなしには簡潔な表現が不可能という性質のものである。「木が倒れている」と言うが、実際に倒れるところを見ていなくても、こう言うのが普通である。これも、ある静的状況を変化の痕跡ととらえる表現であり、これを比喩と感じる人はいないと思われる。このように認知活動を視野に入れた研究を認知言語学と呼ぶことがあり、この視点は特に意味論、表現構造論において有効であると思われる。